

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	石井 達也
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">A Corpus-Based Move Analysis of the Role of Adverbs in Experimental Medical Research Articles</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査 教 授 小野 章          審査委員 教 授 松見 法男          審査委員 教 授 柳澤 浩哉          審査委員 特任教授 河本 健 (学術・社会連携室ライティングセンター)</p>			
<p>[論文審査の要旨]</p> <p>本論文は、基礎医学英語論文 300 編（総語数約 152 万語）について、論文の各セクション内の論の構成要素を解明するムーブ分析を行い、コーパス研究の手法を用いて、副詞の役割を分析した。結果として副詞を含む 106 の定型表現を記述し、ムーブ（構成要素）と副詞の関係、および副詞の文中での位置とステップ（ムーブ内の構成要素）の関係を明らかにした。</p> <p>論文の構成は次のとおりである。</p> <p>第 1 章（「序論」）では、特定分野の英文論文執筆に実用的な表現集リストが少なく、特に IMRD 構造（Introduction、Methods、Results、Discussion のセクションから構成）ごとに定型表現が記述されていないことを指摘した。次に、ムーブ分析の中でも、各セクションの要素を質的に分析する研究を概観した。その後、量的研究としてのムーブ分析を概観し、そこでは研究は大きくコーパス検証型（n-gram と呼ばれる語連鎖の抽出。n は語の数を意味する）とコーパス駆動型（統計的に有意な語のコンコーダンスラインの観察。以下、キーワード分析）に分けられることを示した。またコーパス駆動型が発展させてきた言語理論（Idiom Principle や Pattern Grammar や Lexical Priming）も概観した。</p> <p>第 2 章（「先行研究の概観」）では、医学領域のムーブ分析について言及し、本研究で用いる基礎医学英語論文の 12 のムーブ（各セクションから 3 つずつ）を同定し、これまでの研究ではムーブ同士がどのように繋がっているかが明らかにされていないことを、先行研究の課題として示した。次に医学領域の n-gram とキーワード分析を用いたコーパス研究について言及し、それぞれの研究手法の利点と欠点を示した。n-gram はコーパスデータの概要を把握するものの、形容詞や副詞などが挿入されると別の n-gram として認識される欠点をもつ。また、キーワード分析は、コンコーダンスラインの観察を通してキーワードの文脈における役割を明らかにできるが、定型表現の記述の際に高頻度の n-gram を見逃してしまう危険性がある。したがって、本研究は、研究手法として、n-gram とキーワード分析を組み合わせ、総合的に分析することを示した。キーワードのうち、これまであまり着目されていなかった各ムーブの副詞に着目することで、ムーブが相互を繋ぐ役割（however や moreover 等の linking adverbials）を記述することができるとし、以下の 2 つを研究課題として設定した。</p>			

(1) 基礎医学英語論文の各ムーブにおける副詞を含む 4-gram は何か。

(2) 基礎医学英語論文の各ムーブにおけるステップに関連した副詞を含む定型表現は何か。

第 3 章（「研究方法」）では、研究手法として、(i) 基礎医学英語論文 300 編（全体コーパス）を 12 のムーブごとにコーパスを集積、(ii) 全体コーパスに対する各ムーブのキーワードを Log-likelihood ration と呼ばれる統計手法で算出、(iii) キーワードのうち副詞を抽出（以下、キーワード副詞）、(iv) 各ムーブにキーワード副詞を含む 4-gram を抽出、(v) 各ムーブのキーワード副詞を含むコンコルダンスラインの観察を通して定型表現を記述、(vi) ステップごとに定型表現を分類、の 6 つを行うことを説明した。その後、ムーブの境界指標、コーパスデータ、ムーブ分析の信頼性評価の結果を示した。

第 4 章（「キーワードとキーワード副詞を含む 4-gram」）では、IMRD のセクションごとに、各ムーブのキーワード上位 10 語、キーワード副詞、キーワード副詞を含む 4-gram を提示した。副詞を含む 4-gram は各ムーブの特徴を解明することができた。

第 5 章（「キーワード副詞を含む定型表現の記述」）では、IMRD のセクションごとに、各ムーブのステップ、ステップと副詞の関係、ステップごとの定型表現と例文の提示を行った。結果として副詞を含む 106 の定型表現の同定に成功した。特筆すべき副詞の役割は、Results セクションの 2 つ目の「実験結果」のムーブにおいて、文頭に出現しやすい副詞 12 のうちの 7 つ（interestingly や importantly 等）は「重要な研究の提示」のステップに、また 12 の副詞のうちの 5 つ（however や moreover 等）と文中の副詞 also は「追加・対比的な研究結果の提示」のステップに、それぞれ関係していたことである。一方で also 以外の文中に出現しやすい 21 の副詞（significantly や dramatically 等）と文末の副詞 1 つ（respectively）は「量的データの提示」のステップに関係していた。結果として、副詞が文のどこに出現するかということがステップに関係していることが確認された。さらに文頭の副詞がムーブのはじめで用いられる場合、Results の 1 つ目のムーブである「実験の目的・手法」と Results セクションの 2 つ目の「実験結果」のムーブを繋ぐ役割として副詞が機能することを確認した。

第 6 章（「考察」）では、本研究の言語学的意義（基礎医学英語論文における副詞の役割の解明）と教育的示唆（ムーブごとのステップに関連した定型表現集の作成）を示した。

本論文は、次の三点で高く評価できる。第一点は、質的手法のムーブ分析と、量的手法のコーパス研究を融合して、基礎医学英語論文 300 編について 12 のムーブに基づいたコーパスを構築し、この種の研究での方法論的な進展を示したことである。

第二点は、定型表現をできるだけ記述するために、コーパス研究の手法である n-gram の抽出とキーワード分析の両方を用いたことである。これら両者の研究手法を融合した研究はあまり無く、今後の一つの規範を示したことは、高く評価できる。

第三点は、ムーブ分析が着目してこなかったムーブ同士の繋がりを明らかにするために、各ムーブの副詞に注目することで、副詞（Interestingly や Importantly や however 等）がムーブを繋ぐ役割になりうることを示したことである。特に文強意の副詞（Interestingly や Importantly）がムーブを繋ぐ役割をしていることを示したのは特記すべきことである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3 年 2 月 8 日